東大寺東塔院跡の調査

奈良文化財研究所は、東大寺、奈良県立橿原考古学研究所とともに史跡東大寺旧境内発掘調査団を結成し、２年前から境内整備事業の一環として東塔院跡の発掘調査を実施しています。昨年度まではおもに東塔跡の調査をおこない、塔の規模や基壇周辺の実態解明等、多くの成果を得ました。今回の調査は、この塔を取り囲む回廊の一部と南門の実態解明と、東西両門の位置や遺存状況の確認を目的として実施しました。調査期間は2017年７月19日～11月10日、調査面積は620.8㎡です。

東塔院は、当代随一の高さを誇った七重塔である東塔とそれを取り囲む回廊からなります。これらの建物の創建は奈良時代に遡りますが、平安時代末の平重衡による南都焼き討ちで焼失しました。鎌倉時代に入り復興されるものの、南北朝時代に雷火により再び焼失し、それ以来再建されることはありませんでした。調査前の南門周辺はほぼ平坦で、わずかに高まりを確認できる程度でした。

今年度の南門および南面回廊の調査では、大きく次の２つのことがわかりました。一つは鎌倉時代に再建された建物と基壇の規模、基壇周辺の様子がわかったこと、そして、もう一つは奈良時代の創建基壇も残存しているらしいことです。

鎌倉時代の南門は、梁行２間、桁行３間の礎石建物で、その規模は、梁行約7.2m（12尺等間）、桁行約12.9m（中央間15尺、両脇間14尺）と推定されます。この南門の東西に取り付く南面回廊は、梁行２間（10尺等間）で、中央を壁で仕切られた２列の通路をもつ複廊と考えられます。これらの礎石抜取穴の並びは、『東大寺寺中寺外惣絵図幷山林』（17世紀）に描かれた礎石の配置と一致します。

南門と南面回廊の基壇は周辺に比べて高まりますが、基壇周辺の様相は南北で異なります。北辺では基壇に沿って雨落溝がまわり、この溝には夥しい数の瓦、焼けた建築部材、壁土片等、倒壊時の様子をうかがわせる遺物が重なっていました。いっぽう、南辺では、南門の中央間に幅を揃えた参道が取り付きます。東方の南面回廊から続く雨落溝は南門基壇の東端で南へ折れ、西方の参道までは続きません。面白いのは、この南辺の参道と雨落溝が、実は鎌倉時代の再建当初ではなく、のちに取り付けられていたことです。つまり再建以後しばらく経ってから、基壇の南辺全体に土盛りをして参道や溝を付ける大がかりな改修をおこなっているのです。改修前の地面に相当する土は水性堆積によるものなので、雨水等の排水処理によほど困っていたのでしょう。

問題は奈良時代創建期の状況です。今回、基壇南辺のいくつかのトレンチで奈良時代の雨落溝と思しき遺構を確認しました。鎌倉時代の遺構下には、創建期の痕跡が存在するようですが、基壇や建物の様相は不明のままです。この奈良時代の遺構については、あらためて調査を実施する予定です。手がかりは少ないのですが、鍵となるのは西塔院です。西塔院は鎌倉時代の焼失以降再興されておらず、先の絵図には南門も含めて東塔院とは異なる礎石配置で描かれています。これが創建時のものとすれば、東塔院南門の鎌倉基壇の下には、異なる形の創建基壇が眠っているはずですが、果たして…。今後の成果にご期待ください。　（都城発掘調査部　芝 康次郎）

鎌倉時代東塔院南門と南面回廊の「基壇」（北東から）

東塔院南門に取り付く参道（南から）